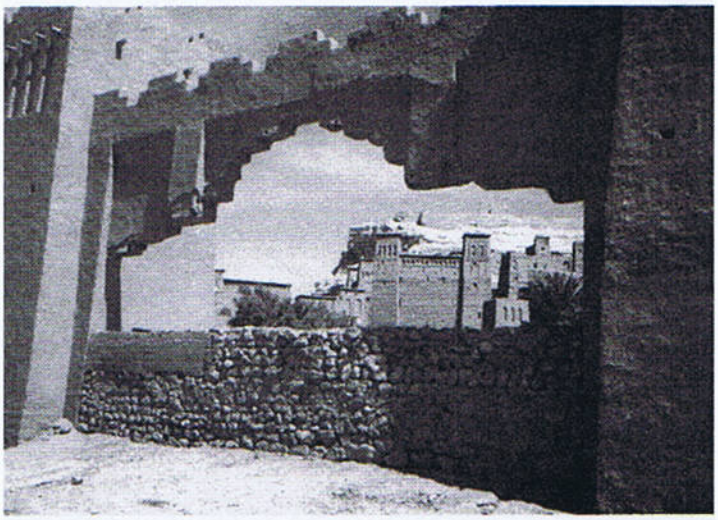
一宮文学

2014.7
第38号



写真：カスバ街道をゆく（モロッコ）

一宮文学第三八号

平成二十六年七月一日発行
発行責任者　浅井悦若
編集責任者　伊藤芳昭
発行所
一宮市大和町毛受字中屋敷五七
浅井悦若方
一宮文学の会
（〇五八六）四五―五七五三
印刷所　株式会社　大東社

波の広がり (10)(11)

あるめら・どすと

10　冬のケヤキ・イシノミヤにて

「冬の散歩道」を過ぎると
「フランク・ロイド・ライト」に会って
さよならを言う、それから
「スカボロ・フェア」が聴こえる
私にはスカーバロでなく、スカボロに
聴こえる。地図帳を開くと、ダブリン
のあるアイルランド島とブリテン島の
間、アイリッシュ海が、ブリテン島へ
くい込もうとする入り海の港町リバプ
ール、そこから東へたどれば、マンチ
エスター、シェフィールド、そして、
イングランド北東部、クリーブランド
丘陵が北海へ落ち込むあたりに、遠く
ビザンチン帝国の商人がやってきたと
いう、中世から続く歴史ある街、スカ
ーバロがある。
あなたは、「スカボロのお祭り市場」に

行くところですか？私を覚えていて欲
しい、海水と岸辺のはざま、波打際で
まっていてくれ、（パセリ・セージ・ロ
ーズマリーとタイム）（はせり・薬用さ
るびあ・まんねん草とたちじゃこう草）
あなたは、「スカボロのお祭り市場」へ
行くんだろう、（パセリ・セージ・ロー
ズマリーとタイム）イングランドの深
い森、（エミリーの妹、アンは保養先の
スカボロで、結核で、死んだ、29歳で
あった）「嵐が丘」でのぞむ海と空と光、
と
「コンドルは飛んで行く」
征服されたインカの末裔、アンデス山
中のメロディだが、その歌詞にコンド
ルはいない、蝸牛よりは雀になりたい、
釘よりは金づちになりたい、道よりは
森になりたい、曲に乗ってコンドルが
飛んで、消空して、捜す
「アメリカ」

ゆったり、ゆたり、ゆた、ゆ
ゆゆゆゆゆ
ふゆ、ゆれる

母（この母は、十数年程前に亡くなった父の後妻、私
が三十歳まじかにやってきた）を訪ねるのが、週、一度
になった。母が脳梗塞で倒れてから、一年が過ぎようと
している。自転車で、母のいる老健施設へ向かう。その
施設は、私の住んでいるマンションからみて、はるか南
東方向にあり、それでもイシノミヤ行政区にあり、車を
手放してから、ずいぶん長い年月がたった私の踏む自転
車で、一時間程（若い人なら二十分位か？）の所にある。途
中で、私のマンションのすぐ近くの、ひとりで母が住ん
でいた実家の裏庭から、咲いている花を切りとって、束
ねて、自転車の前かごの袋へほおり込む。

（花の袋の暗闇、水と空と光がない）

老健施設の受付で、受付票に記載し、スタンプを押し
てもらって、二階へエレベーターで向かい、ナースステ

ーションのカウンターの上に、それを置き、丸スツールを片手につかみ、白い廊下を、母の部屋に向かう。

その部屋は、南北に細長く、空調のきいた個室で、南の腰壁より上は一面の窓（車椅子やベッドの上にいる母からは空だけがみえる）で、西の壁に沿って、南から、物入、小形薄型テレビ、西壁に頭方向を密着させたベッド、細長い棚（その棚の上に時計と花々）、出入口近くに背もたれ付のパイプ椅子の順に並んでいる。床も、壁も、天井も、ベッドも、物入も、棚も、時計も、白、微妙な違いの白が揺らいでいる。

たいてい、北側の出入口である大きな片引き戸は、引き込まれて、開いたままで、母は、黒い車椅子に輻を置いて、背中をむけて、黒いテレビをみている。画面ははなやかだが、電波はテレビの黒に吸い込まれてみえない。この部屋の塵は、音のしない掃除機で吸い込まれている。

（このごろ、青い地球を廻る人工衛星の軌道あたりに、宇宙の塵が漂うようになったので、衛星への衝突あるいは接触を避けるために、0.1㎜の金属の糸を2㎞に撚りあわせる漁網をつくる技術を使って、長さ50㎞の紐を、大気圏を抜けて真空に近く、殆んど無重力に近い、衛星を打上げるために建てた、宇宙エレベーターの頂上につなぐと、紐はつながれたまま、予測不能の波の動きをし、その紐に、地球の磁場と共鳴するプラズマ電流を流すと、それに引かれて、宇宙の塵は、大気圏に引き込まれ、いく筋もの光となって、青い地球に向かって、まっさかさまに落ちて、燃えつきるはずである、と、「私はかもめ」が言った。）

「来ましたあー」と言って、部屋の照明スイッチをいれる。明るくなって、白がまぶしい。母は、テレビを、左手をさしだして黒いリモコンスイッチで切り、テレビを暗くして、車椅子の向きを変え、私の持ってきた花と向き合う。母が枯れると捨てているので、残り少なくなった先週の花を捨て、白くつややかな陶製コップの水を替え、母の身ぶり手ぶりの注文をききながら、持ってきた花を、そのコップにいける。それから、ナースステーションから持ってきた丸スツールを母の前に置き、その上に、物入からとりだしたオセロゲーム（このゲームは、シェイクスピアの『オセロ』から名付けられた）を乗せ、背もたれ付のパイプ椅子の向きを少し変え、車椅子の母と対面する。右手の麻痺と失語症は、あいかわらずのようであった。

（命は平等だと言っていた、虎雄さんは失語症ではなく、全身の筋肉が次第に衰える難病で、現在は首から上だけが正常であり、車椅子に固定され、お付きの人が、透明な板に書かれた、ひらがなを、虎雄さんの眼の動きにあわせて指で追い、それがコンピュータに連動されて、声がきこえる、意志を伝える、情報を伝える、帝釈天で産湯を使い、奮闘努力のかいもなく、今日を涙の、今日も涙の日が暮れる、私、生まれも育ちもカツシカシバマタです、姓は車、名は寅次郎、人呼んで、フーテンの寅とはっします）

母は黒になり、私は白になり、ゲームをはじめる。母は、左手だけで器用にオセロの石（片面、白、その裏面、黒の丸い薄い小さい石）をつまんで置き、ひとつふたつと石をひっくりかえす。ゲームは、たいてい、私が勝ってしまうので、私は同点を狙ってゲームした。

ゲームが終わって、雑談をはじめる。雑談といっても、殆んど、私が勝手に、ひとりでしゃべっている状態で、私の話の内容を、母は、理解しているようであったが、私が意見を求めると、しばらくの沈黙の後、「もう、ええわ」となってしまう。話のはずみで、よくでてくる言葉は、「はよ、死にたいわ」であった。それに同調して、「私も、はよ、死にたいわ」と返すと、眼をくりっとさせて、少しびっくりした様子で、私の話を続けさせる。間をもたせるために、新聞や週刊誌で読んだことなどを、勝手気ままに、思いつくままに、母の反応をみながらしゃべっていた。原発の話はよくした。秘密保護法の話も、小話その一的にしゃべっていた。

（2013年12月6日深夜、秘密保護法が成立すると、中審問官、原子力課の猿虚空は、直ちに、黒いベールで顔を隠し、秘密中審問官、猿秘空になって、制度設計にとりかかった。

まずは、自衛官、警察官、裁判官、そして、原子力、軍事産業、先端技術の各々の関係者の経歴、思想、経済状況、異性関係、親族、友人、外国との関係などをデータベース化することとし、そして、それらを、徐々に、普通の人にも適用して、最終的には、全国民をデータベース化するつもりであった。

次に、この法に対応する、秘密組織を設立し、はりめぐらす。秘密警察、秘密裁判所、秘密町内会等々。

猿秘空は言う。我々は、法にのっとって、すべてを取りしきる。ただ、法は言葉であるから、絶えず揺れる。いびつに強烈に虐げられた心の持ち主が、我々の上位の者、すなわち、大審問官になった場合、彼のやり方によって、彼の独裁を許すことになるであろうし、彼が絶大な権力を手にいれても何の不思議もない。我々は、あくまで、法に従って行動する、良心的中審問官である。）

〈二〇××年のある日、中審問官、猿秘空は、中央制御室のモニターで、イシノミヤの取調室の取調官と被疑者の様子をみていた。

被疑者「私はなぜ逮捕されたのですか？」

取調官「秘密保護法により、それは秘密です」

被疑者「あなたは誰ですか？」

取調官「それは秘密です。君に言っておくが、どのような質問をしようが、君は、もはや秘密の連鎖につながれており、抜けでることはできない」

猿秘空は、どこかで、同じような場面をみたように思った。それは、カフカの『審判』の中にあった。

「あなたが告訴されているかどうか、わたしはまるきり知らない。あなたが何者なのかすら、まったく承知していない。あなたは逮捕された。それ以上のことは何も知りませんね。あなたの問いにお答えできないから、代わりに申し上げておくが、われわれのことや、あなたの身に生じたことよりも、ご自身のことを、お考えになることですな。罪なくしてといったことを言い立てないこと。あなたの印象をなおのこと悪くしますよ」〉

母が、時計を左手の人差し指で指差す。みると、午後五時を少しまわっている。夕食のために集まる時間で、私に帰れとうながしているのだ。母は、気を使っているのだ。

エレベーターの前まで、丸スツールを片手にかかえ、白い廊下を、車椅子の母とゆっくり進み、ナースセンターに丸スツールを返して、いつものように、左手で握手をして別れる。

外は、むんとした暑さで、ヨロヨロ、自転車を進め、途中で、喫茶店にはいる。

アイスコーヒーを飲みながら、新聞をみていると、明日、イシノミヤの新しくできた中央図書館のある駅ビルの三階で、Yさんの話があるという記事をみつける。

五年程前、豊島図書館（イシノミヤの繊維会社、豊島の名の付いた図書館、新しく中央図書館が、駅ビルにできたので、現在は閉鎖）の一階ホールの定例の展示（その時は、九条の会の展示であった）から、すこし離れた二階、図書閲覧室へむかう階段の横、床から天井いっぱいの、東海北陸道の説明のために作られたと思われる、イシノミヤの航空写真のパネル（眼をこらせば、撮影された時点での各個の建物が特定できる）の手前に、Yさんがイシノミヤの地図の話をするという立看板があり、その頃、私は、私の若い頃からの友人で、亡くなったばかりのKさんを、イシノミヤ文学、三十三号、『Kさんを書く』で書いたばかりで、書いた背景として、実際の一宮ではなく、イシノミヤという見えない水面に、私と世界の揺らぎ、波の広がりを、見たいと思っていました。

豊島図書館、三階の広い学習室（高校生たちがたむろしない時に、ここで、私はよく『Kさんを書く』を書いていた）の南面、腰壁の上いっぱいに、縦にも横にも窓が広がり、大江川近くの黒い借家に閉じ込もる以前のKさんが、毎日の逍遙の道すがら、体操して、文庫本を読みふけっていた地蔵寺、その黒瓦の大屋根と濃い緑、そのしげみを黒く小さい鳥たちが声をたてて飛びかい、東には、ときおり、高架になったJRやナゴラ鉄道の電車が、民家の屋根の上を滑る借景をなしていた。

Yさんがイシノミヤの地図を語ったのは、豊島図書館、別館の、借景のない三階の会議室で、Yさんは、私より年配で、小柄で丸く、地理学が専門で、大学を退職後、イシノミヤの木曽川にほど近い笹野に住んでいるという、

経歴と近況を話した。明治に作製された五万分の一の地図が配られ、扇状地部分と思われる部分に、現在ではその痕跡の殆んどない、桑畑の印が散りばめられ、木曽川氾濫地帯の水田の印部分と違い、そこには機関銃を据えることができるという、Yさんのひと言だけを、なぜか覚えている。

駅ビル三階ではじまったYさんの話は、Y塾と名付けられ、およそ一ヶ月に一度、プリント資料が配られ、Yさんが命名した地歴学とからめながら、イシノミヤの地理と歴史、日頃、考えていることなどを、土曜日の午後、市民講座的フンイキの中で聴いた。若い人の姿はあまりなく、年配（私も含めて）の人が多かった。

（あるめら・どすとのY塾について、まとめようとしたノート）

「いま、自分、ここ」だけでものを考えると間違えるか？「いま、自分、ここ」を徹底して考え抜くこと。そうすれば、「いま、自分、ここ」以外のものが、必然的に立ち現われるだろう。誰でも「いま、自分、ここ」からしか、はじめることができない。

と、簡単に書いてしまったが、徹底的に考え抜くことは、簡単にできはしない。何よりも、見えないものを見るための柔軟性と想像力の欠如、地に足をつけることと浮き上がることの中での矛盾を包み込み生きることの困難さ。

いま、資本主義社会では、産業革命以来、社会の主体は、産業であり、企業であり、資本であり、人間ではない。1989年のベルリンの壁崩壊以後、金融資本は自分の思うままに動かせるフィールドを持ち、資本主義社会の主体が、ものづくりから、金融資本に変わっている。資本は全世界をつくりかえる訳ではなく、儲かるところを、つまみ食いする。人間と資本との調整役となりうる、公的セクターも、教育も、マスコミも資本の方に顔を向けている。

とりあえずの戦術と戦略、はてしなき対症療法（自分、まず生きてゆくこと、イシノミヤ、ベーシックインカム（外からの所得）をもってきて自立をめざす、あるいは、ナゴラの優良衛星都市をめざして、ノンベーシック領域（街を満たすもの）の充実、合法的暴力の独占システム

である国？世界？？）

世界全体をみすえ、グローバリズム、人類全体に対応した戦略がない。

イシノミヤは、一宮であって一宮でない。血が死になって石の宮？宮は闇であり、イシノミヤは闇の椎であり、どんぐりころころで、お池にはまって、さあたいへんで、どじょうがでてきて、こんにちは、ぼっちゃん、いっしょに遊びましょで、W・フォークナーのミシシッピー州、ヨクナパトウファ郡にならって、何か広がりの予感をもって、ひねった、ずれた、架空の、波打つ街でありうるのか？

イシノミヤを拡大すれば、地方、国家、世界、地球、太陽系、宇宙であり、縮小すれば、学校区、町内、家庭、個人、……分子、原子、素粒子であり、それぞれの位置と姿勢が揺らめいて、描かれる物語が、時に、はっきり姿をみせる。

私は、無力無能で、地を這う虫であり、家畜であり、奴隷であり、『阿Q』であり、人間であり、滑空する鳥であり、いつ消えても世界に何の影響も与えぬ者であり、波であり、あなたであり、あなたたちであり、市民なる言葉にうさんくささを感ずる者であり、それでも言葉であり、魂であり、物質であり、すべてであり、すべてでない。

たとえば、猫が日なたで眠っている
どのような状態であれ、生きている現場が
あるだけであり
できれば、それが穏やかであることを願っている

年末のY塾のアンケートのお願いに次のように書いた。

(1)どんな街を住みやすい暮らしやすい街と思われますか？
（普通に生きてゆける街、普通でよい。）

(2)イシノミヤの将来像について、思うことを述べて下さい。
（悲観的、ナゴラのベッドタウンにますますなり、少ないポイント以外は、スラム化するのではないか？）

(3)その他、質問、意見等があればご記入下

さい。

（語られているのは、学者として、力を持つ人への提案。市民というものが、ここ、日本では、はたして力あるものとして、存在できるのか？私の場合、無能、無力のひとりがいるだけ、そこから、すべてが、はじまると思います。ちらりと語られる雑談的なものに、親しみを感じました。）

年があける。いつも暗い。十五、六年程前、私が五十歳前後から、家の近くのR新聞店で、日曜日の朝刊の配達をはじめて以来、大晦日には、元日に雪など降らないことを願いつつ、午後九時ごろには床につき、次の日、すなわち、新しい年の午前一時半に起きて、午前二時に新聞店について、元日の新聞配達の用意をする。元日は、通常の日と違って、チラシが分厚く、重く、人手が必要なのだ。数日前から、チラシは用意されて、配達区域ごとに、いくつかの山に分けられて、朝刊のトラックがつくと、束ねられた朝刊が手渡しリレーで、それぞれの位置に置かれ、それから、4人一組で、チラシを新聞にセットし、セットされたものをたたき（そろえ）、スポーツ新聞、経済新聞等をセットし、行き先ごとにまとめ、しばり、運び、それらの作業のくり返し、各配達員が、自転車あるいはバイクで積める分だけ持って出発し、積めなかった分が、配達区のそれぞれの場所へ車で運ばれる。店内作業が終わり、家へ帰って眠る。これが、私の五十歳前後からの正月行事である。朝陽がのぼるころには、いつも眠っている。

中審問官、猿一族の新年会にて
一族代表、百代目、猿悟空のあいさつ

「あけまして、おめでとうございます。皆様の日々の精進で、恒例の猿一族の新年会を、この特製觔斗雲で地上を見おろしながら、今年も開くことができました。これも我々、猿一族の御先祖様であります孫悟空様が、影ながら我々を見守って下さるおかげであると肝に命ずるところであります。皆様、ご承知のとおり、我々の御先祖様である悟空様は、産業革命以来、姿を地上にさらすことがお嫌いになり、我々の頭の中で金の輪になって、

おかくれになっておいでです。何かことがあれば、この頭の中の金の輪が、我々にくい込み、その存在をお示しになるのでございます。金の輪が、我々にしみついて以来、我々は、由緒ある中審問官の家がらである、猿一族となったのでございます。我々は、我々のよく知らない、しかし、たいへんな力をお持ちの大審問官様に任命されているのでございます。きくところによりますと、大審問官様は、マネー神にお仕えとのことでございます。このごろ、大審問官様が、中審問官であり、猿一族の代表でもあります、私、猿悟空に、ちかごろの家畜や奴隷は、「いま、自分、ここ」以外のことを考えすぎると、それとなくいわれ、そろそろ生け贄の用意をするようにとおっしゃいました。それをするには法律の用意がございませんがと、私がいうと、そんなものはなんとでもなるであろうとのおおせでありました。たしかに、なにごともなるようにしかなりませんので、何がおころうと何の心配もいたしておりませんので、皆様、ご安心を。ここに、我々、猿一族のますますの繁栄を祝して、乾杯！」

『サウンド・オブ・サイレンス』

あるいは
「7時のニュース・きよしこの夜」
ささやかで、つつましい
（人が沈黙を守り通せないのは、言葉を
届けるべき相手が、届けたいと思うだ
れかがいるからである）
人はかみひとえ、人ははにかみ
人間はかみひとえで生きている
どうしたら、普通に生きてゆけるのか
言葉を平明に立てる
そして、時がくると、力が抜けて
言葉の軀は、横たわり、透け
青空の下、みずからのふつうに
多くのひとびと向きあう
静かな静かな覚悟
冬のケヤキ